

【図画工作科】

自己・環境・他者がかかわりあうことによって生まれる表現

～「かかわる」から生み出される「つくり出す」喜び～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

子どもたちは、形や色のもつ美しさやその組み合わせのよさに気づきながらイメージをふくらませ、造形活動に取り組む。何度も作り変え試行錯誤しながら納得のいく表現に近づける、その過程には多様な対話がある。

子どもたちは、素材や材料とかかわることによって造形活動を行う。しかし、ここでいう素材は図画工作科の表現のために整えられたもの（絵の具、画用紙、粘土など）だけではなく、樹木や土、石や水などの自然物も造形活動の素材となる場合がある。このことから自然物を含めた広い意味での「環境」とのかかわり合いの中で子どもたちは造形活動を行い、「環境」との出合いを果たしていく。この「環境」から伝わる感覚を視覚に止まらず体全身で感じることによって、イメージに深まりと広まりを与える。自己の感じ方や捉え方を表現するために、形や色と向き合い、ためしてみる。そのためした結果から再度イメージし、そしてまたためす…といったことを繰り返す。その過程には形や色やイメージに支えられた対話の深まりがあり、この対話の深まりこそが重要なのである。

そしてこの対話の深まりには、「他者」も大きくかかわってくる。自己の感じ方や捉え方が具体的な形や色となって表れた際、同じような体験を共有した「他者」との表現の違いを目の当たりにする。他者とかかわることによって、自らの感性の特質を知り、ものを多面的に見ることができるようにもなるだろう。このような「自己」「環境」「他者」が複雑にかかわり合う中で、自分らしい表現に向かい自分なりの学びの目標や目的が生まれていく。つまり、学びの対象をかかわり合う中で自ら生み出していくのである。

(2) サブテーマにかかわって

① 図画工作科における言葉とは

図画工作科におけるあらゆる活動は、言葉によって支えられている。ただ、芸術活動を含む図画工作科の特徴は、その「言葉」の多様性と「言葉」以前の世界との深いかかわりにある。そこで、以下に示す3つの点から図画工作科における言葉を捉えてみたい。

コミュニケーションとしての言葉・・・図画工作科では、一般的な言語に加えて、「形」や「色」も造形言語として捉える。造形的な表現活動において、形や色は他者とのコミュニケーションの重要な担い手である。

言葉にできない言葉・・・造形活動はいつも感性的活動を伴う。身体感覚によって（しばしば情動とともに）現れる環境（外的世界）は、未だ明瞭な言葉にならずに漏らされる「言葉以前の言葉」を生み出していく。身体感覚と密着して発せられるオノマトペや感嘆の叫びなどの声は、回りの子どもたちの身体に働きかけ、感覚的体験を共有するためのものでもある。

表現を語る言葉・・・コミュニケーションとしての造形（言語）を読み取り、批評することにより生まれる言葉の世界もある。図画工作科において表現（作品）を客観的

に見て語る鑑賞の活動は、感性の世界にあった身体と表現、そして作品を、言葉（知性）の力で文化と社会へと広げるコミュニケーション活動として捉えられる。作品（かたち）をめぐる対話は、自己と他者、身体と言語（社会）との関係性を揺さぶりながら形成していく。

以上のような言葉が交わされ、統合されることで活動が繰り返されられるといった姿から、図画工作科では3つの点を言葉をとって捉えたい。

②子どもの言葉でつくる図画工作科授業

子どもの表現のかたち（図画工作科における言葉）は極めて多様である。子どもたちの柔軟な身体感覚は、形や色で表されたコミュニケーションとしての言葉の多元的な世界にある。その未分化な世界の中に子どもたちは意味をつくり、言葉を見出そうとする。この意味をつくりだそうとする作業こそが図画工作科では大切なのである。芸術活動は「意味を作る」と捉え、自己や環境、他者が関わることで形や色が意味を生み出してくる瞬間を作っていくことが重要なのである。

そこで、今回は「ためす」と「比べる」を大切に、学びを進めたいと考える。「ためす」ことで、「うまくいった」「思うようにいかなかった」など何らかの結果が得られる。例えうまくいかなかったとしても、それは感覚世界での貴重な経験となり新たな可能性が切り開かれているのである。また「ためす」ことは、自分の生み出した形や色が「コミュニケーションの言葉」として機能するのかを確かめる作業ともなる。「言葉にならない言葉」と「コミュニケーションとしての言葉」との往復が行われ、感性が磨かれていくと考える。

そして、より一層自分らしい表現を目指す上で、「比べる」機会の充実を図る。子どもたちが生み出したかたちは、造形言語として他者とのコミュニケーションの媒介となる。「比べる」ことで、他者との表現の違いに気付くと同時に、自身の生み出したかたちも「対象化」することで、「表現を語る言葉」の中での活動が行われる。そして、自分の表現に意味や価値を見出したり、またさらにためしたいことが見つかったりすることもあるだろう。

「ためす」「比べる」の両面の言葉の働きを授業の中に位置づけることで自己の造形活動に意味を見出そうとする瞬間をつくりたい。

（3）図画工作科でめざす子ども像

感性豊かに他者や環境にかかわろうとし、自分らしい造形的表現力をもっている子

子ども達は、環境に対して自分の感性を存分に働かせ、体全体で感じながら造形活動に挑む。その活動で見られる試行錯誤する姿は、造形的表現に自分らしさを求めている姿である。そして、ふと周りを見れば、自分と違った考えをもち自分と違った表現をする他者の存在に気付くであろう。その違った形や色のおもしろさを知ること、新たなイメージを膨らませ、またためすことの繰り返しによって自分の求める表現に近づくことができる。自分らしいかたちの実現のために、積極的に他者や環境とかかわろうとし、新鮮な思いや表現を敏感に感じ取ることでイメージを広げ、作り出すことに喜びを感じ追いつめられる子どもを育てたい。

2. 図画工作科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

（1）図画工作科における“問い続け、学び続ける子どもたち”

子どもたちの柔軟な身体が「環境」との新たな出会いを果たしたとき、何か作り出すことへの期待感や高揚感を持つだろう。その初めにもつ思いが造形活動への動機となり、自分なりの表現の探求に繋がる。図画工作科では、このような体験的で主体的な学びが元より重視される。そこ

で、造形的な表現の追求における問題を主体的に発見し、解決しようとする姿を図画工作科における「問い続け、学び続ける子どもたち」とすると、その鍵となるのは先に定義した3つの言葉の世界が重要であると考えている。このことを受けて、各段階においてもとめる子どもの姿を以下に示す。

低学年	中学年	高学年
ものとかかわることで感じたことや見つけたことを基に、体全体を働かせて自分の思いを実現しようとする活動を楽しむことができる。	ものや場所などから発想したことを基に、他者とかかわりの中で前学年までの経験を生かしながら、手や体全体を働かせて新しいかたちをつくり出そうとすることができる。	ものや場所などの特徴から発想したことを基に、空間の様子も考え合わせながら、前学年までの経験を総合的に生かし自己のイメージを実現しようとするすることができる。

(2) 図画工作科における子どもへのみとりと支援

図画工作科は一つの答えを求める教科ではないことから考えて、子どもへのみとりと支援が直接学びに影響する。教師の「こうあってほしい。」という思いは、子どもの柔軟な発想の可能性を奪ってしまうことさえある。

まずは、子どもたちが造形活動に対する自信と安心感をもつことが重要であると考えている。一人一人の考えや表現に寄り添い、その子なりの表現のよさを認めることで、自分のためしてみたいことへじっくり向かうことができるだろう。具体的には、子どもの反応や表情、つぶやきを見取り、板書したり全体の場に取り上げたりしたい。そして、子どもの表現や活動から生み出されるものや出来上がったものを記録し、振り返り考えることができる時間をつくる。さらに、自分なりの手ごたえを感じられるように、これまでのあらわし方を見直したり、他者と共有したりして図工カードを効果的に利用する。このような支援を行いながら、子どもたちの学びを断続的に多面的にみていきたい。

(3) 実践事例より

第3学年「自分だけの赤をつくろう」

子どもたちはクラスカラーの赤を出発点とし、自分だけの赤色をつくりだすことに取り組んだ。画用紙に色を塗り重ねたり、削ったり、水で洗ったりしながら納得するまで作業を続け「自分だけの赤」を追及する題材である。その中で見られた姿を以下に示す。

ゆうさい：お～。それどうやってやったの？きれい！

しょう：やすりを使ったんだよ。これだけでも、土みたいな色になった。

 どんどん赤がかわってきたよ。ウエハースみたい！

ゆうさい：すごい！下の色がすけていってきれいだね。

(やすりでけずりはじめ、さらにでてきた粉をこすりつけるなどして自分なりの方法を試す)

このような会話が、図画工作科では繰り返される。形や色がコミュニケーションの媒介として機能し、それと共に感性の世界にあった表現が言語として語られている瞬間である。また、上記の会話に至るには、形や色に対する言語にならない感覚的な感情や思いが子どもたちの中には生まれているだろう。このように、図画工作科における「子どもの言葉」を捉えることで、見取りと支援を行っていきたい。

3. 研究の展望

造形的な表現を中心とする図画工作科の活動では、子どもたちは初めから表したいことがあるとはかぎらない。造形活動を行なう中で、「表したい主題や取り組みたい課題が具体的に形成されていくことが多い。また、当初の「表したいこと」が造形活動に取り組む中で変化していくこともしばしば見られる。その過程には、子どもが造形活動に知性と感性の双方で働きかける、ダイナミックな変化の中に生まれてくる学びがある。」完成された「作品」はこの過程の結果生まれたかたちであるが、図工科の学びの本質は「作品」を生み出す過程の中での問題発見と問題解決の絶えざる動きの中にこそある。造形活動の充実を目指すための方法を、以下に示す。

(1) 題材設定と題材配列

題材が学習の基となることから、やる気を高め、学ぶ意欲を喚起するものでなければならない。それに加え、学びを広げ深めるためには、子どもの柔軟な身体感覚から発せられる豊かなイメージに応答し、何度もつくりかえたためすことができることも重要である。このような題材を、形や色への表現活動を存分に行なうことができるように、子どもたちの発達段階に対応したものを考慮し、配列すべきである。連続的に学びが積み重なるよう、どのような題材がその学年にふさわしいのか、そしてどのように組み込んでいくのかを考える。

(2) 学習展開と空間や場の設定

子どもたちが自分なりの表現を模索するための原動力となるのは、題材との出会いであると考ええる。そこで、題材と子どもたちとの出合わせ方を大切にしたい。そして新鮮な出会いを経験し、活動の意欲を掻き立てられた子どもたちの表現を次に支えるのは、空間や場である。学びの軸を意識しながら、子どもたちの意識の流れと共に表れるであろう造形活動に見通しを立て、存分に表現活動できる空間や場作りが必要である。また、子どもの「ためしたい」ことの時間も保障されなければならない。「ためす」ことが繰り返される中で自分なりの学ぶべき課題が生まれる。そして活動のふりかえりの時間、他者と「比べる」時間や場の設定により、多面的な見方を育て、主体的に課題を発見できていく力を養うことをねらう。

4. 研究の評価

子どもの数だけ学びがあることから、一人一人の学びの道筋を見取り思いに寄り添うことを大切にしたい。そして、その学びを3つの「言葉」から見取っていきたいと考える。

「環境」にかかわることでもれ出た感嘆の声、身ぶりや手ぶり、結果としての形や色は、子どもたちの学びや体験によるものである。「言葉にならない言葉」と「コミュニケーションとしての言葉」が表れた子どもの姿をつぶさに記録し見取ったり、「表現を語る言葉」をワークシートや発言の記録から見たりする。このことで、設定した題材がもつ価値や魅力を確認することができ、さらに、柔軟な子どもの身体のかかわりにより生まれた課題やさらなる学びの可能性を、教師も同時に明らかにできる。また、子どもたちの学びは活動している題材の中ではなく、次の題材に表れることも考えられる。よって、一つの題材に止まらず、長期的な眼をもって評価していくことも必要である。表現活動する子どもたち一人一人の変化を長い眼でみとり、支援と評価を繰り返していきたい。

【参考文献】

- [1] 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 2003, 教育芸術社
- [2] 「ためす」, 『形 forme』, 2014, No. 303, 日本文教出版
- [3] 「教科書特集号」, 『形 forme』, 2014, No. 300, 日本文教出版